

## 第4章 被害者の問題としてのケアをする人

将来、被害者のケアをすることとなる多くの人たちに危機対処のプロセスについての概観を理解してもらい、それによって彼らがパートナーとしての課題を効果的に把握する能力を身につけてもらうことが、この研究におけるわたしの意図した点である。これまで被害者自身が、彼らの要求と願望を取り上げてきた。ほとんどの場合、人のケアが十分でなく、むしろ負担となっていたことが明らかにされている。通常は、ケアをする人に、被害者のメンタリティーが分かっていないということはその理由とはならない。むしろケアをする人が、そもそも被害者とどこから接しようとする態勢にないということが原因である。彼ら自身が問題になっているのである。

ベータールで行われた一九七八年のドイツ福音主義教会(EKD)<sup>43</sup>の教会会議や、一九七九年以来の大学の教育学部の学生が参加したセミナーでのベータールの滞在を通して極めて重大な問題が明らかにされた。

教会会議はベータールでおこなわれ、「何のための生活と教育？」というテーマで議論がなされた。会議の期間中に施設のスタッフや障害者と出会うプログラムが予定されていた。これは奉仕「ディアコニー」の課題についてなされる議論の通常の様を越えたものになった。教会会議は、教育活動特に恵まれない人たちのことを課題にした。ハノーファー大学の学生

たちは、障害者とどうしたら実際に共に働くことができるかを経験するため、研修セミナーに参加した。けれども、ベータールに居住している人を訪問し、出会う「具体的な話になると、学生も教会会議のメンバーも同様に、全く予想外の個人的な障害と闘わなければならなかった。彼らにとって自分自身のアイデンティティーが問題となったのである。教会会議のメンバーは、理性的な防衛装置を働かせていた。たとえば、

「そのためには時間がたりません。」

「わたしはすでに理解しているし、あまりにも詮索好きのように見えます。」

「障害者をそのように見学するのは遠慮したほうがよいと思います。」

「わたしは告白します。どのように接したらよいか、正しくわかっていません。あなたはわかっていますか。」

「わたしは喜んであなたがたとそこに行こうと思いますが、わたしはまだそういうものを見たことがありません。そこで何をしたらよいのでしょうか。」

それに対して、学生たちの場合には攻撃的な批判がみられた。「障害者でいっぱい町の町をどうやってつくったのですか？」などと、彼らはグッター状態を嘲った。また、さらに「そこで働いている人が簡易ファイルを一冊つくって三ペニヒをもらい、三五マルクにもならない小遣い程度の金額しか手に入らないのであれば、彼らはまともな収入を得ているとは言えないのではないのでしょうか？」と、ベータールの居住者が搾取されているのではないかとも言っている。彼らはベータールの案内所ダンクオルトでの訪問者歓迎会の際に、無言で抵抗の

意を表した。

教会会議のメンバーに対しても学生に対しても、有益な申し出がなされていた。教会会議のメンバーには個人的な話し合いの中で、訪問の勧誘がなされた。とは言え、ベータールの居住者たちは彼らの「教会会議のメンバー」の来訪を何週間も待ちわびなければならなかった。関心をもつ人たちは、議事の前後や食事の後に個人的にベータールの一つの施設に案内された。それは驚くべきことだった。障害者たちは、教会会議に参加している障害をもたない人たちの訪問があるたびに、隠しきれない喜びをくりかえしあらわした。彼ら障害者には先入観がなく、それによって訪問者の困惑も解き放たれ、喜びに満ちあふれた。またその喜びに誘われるかのように、絵を描いたり遊んだり、互いの話に耳を傾けるなど、いろいろなことが共におこなわれることも少なくなかった。また人間的な触れあいには不安を和らげ、関係を成長させた。

ヨルク・ツィンク<sup>44</sup>は、このことをわかりやすく書いている。

「不安が健康なわたしたちの中に生じるといことは事実である。わたしたちも彼らのように健康や平静さ、安全と能力、自由と、さらに自尊心を失うのではないかと案じたりもする。また、こころの底からのぼってくる根源的な不安がわたしたちの中で動き出す。わたしたちは目と耳を閉じ、ついには口も閉じて通り過ぎる。わたしたちができることは、わたしたちが不愉快に思うことに触れないで、排除することである。けれども、それによって、非人間的なもののかたまりが健康な人と障害者たちの間に割り込んで来るのである。」

学生たちは自由に使える時間を十分もっていた。学生たちが計画し、目指している学習の特徴は、実習の経験と経験の理論的反省とが互にかかわっていることである。そこで、研究課題セミナーは臨床牧会訓練 (Clinical Pastoral Training) のモデルにならうと、経験と理論をつなぎ合わせていく。研修期間は三つの課題を持つ。まず、午前中は、ベートルの施設のいろんな作業場で、学生たちと成人の障害者が共同の実習体験をする。続いて、昼休みの間に、ベートルの居住者たちと一緒にしたことを、文章化された会話の記録に基づいて、それを理論的に反省する。この会話記録は、自身の態度についての個人の色々な疑問を整理するためのもので、さらに、午後はこの記録を用いて理論的研修がなされ、グループごとに可能な対応策を確認するための行動の理論化がおこなわれる。学生たちが出した最も重要な結論は次の通りである。

障害者が関係の橋渡しをしているのに「健康な」わたしたちが関係を妨げ、その障害となつている。わたしたちは隔ての溝を怖れ、橋を取り壊すか、あるいはそれらを全く見ていない。

障害者は作業所で搾取されてはいない。というのは、彼らはそこでおこなっていることの意味と、人と共に働くことの意味を体験しているからである。障害のないわたしたちこそ、実績と利益が人生の意味を教えると思っている犠牲者である。なぜなら、わたしたち

は、経済的目標を達成しなければならぬと思つあまり、しばしば、おこなっていることの意味を失っているからである。

人間社会の中に統合されねばならないのは障害者だけではなく、障害者でないと思われる、働く能力があつて、有能だと思つている人々も同様である。障害者でないかのように思われるわたしたちは誤つた目的や一方的な規範から解放されなければならないのである。わたしたちは新しい人生の可能性を共に発見するために、障害者の批判を必要としている。

教会会議の参加者は自己評価の書類を作成したわけではないが、その態度や反応から、彼らの多くがこころの準備が不十分で、そのために不安な気持ちになつたと自認しているものと推定される。双方共に同様の経験が見られる。

・ 障害者がわたしたちの問題ではなく、障害者でないわたしたちが彼らの問題となっている！

ユルゲン・モルトマン<sup>45</sup>はこの問題を神学的に考察している。

「拒絶的な反応は、障害者をらい病の人たちの位置に連れていく。彼らは隔離され、無視され、ある

いは同情によって苦しめられる。障害者がわたしたちの問題ではない。わたしたちが彼らの問題である。」

教会会議のメンバーも学生たちも 連邦政府の精神医学アンケートに書かれている経験と同じく 社会的統合が情報の問題というよりもむしろ相互のふれあい、すなわち、人と接し、一緒に働く能力の問題であるという認識にいたっている。このことから、(障害者でない)人たちが、経験を通して、自分自身が障害者にとっての問題であるということを知れば、彼らは自分の考え方と行動を変えるものと考えられる。そこで関係の障害は徐々に克服される。このことは情報を知って始まるのでなく、できることを一緒にすることから始まる。ここから、教会の活動にとって、また、障害者との人間的出会いにとって、次のことが言える。

- ・ 相互的活動は情報に優先する。

経験は努力目標としての認識に先行すべきである。

学生たちはこのことを彼らの経験に基づいて次のように記している。

「この研究課題セミナーは、わたしたちに多くの新しい経験をもたらしました。それは、障害の有無にかかわらず、わたしの他人に対する態度、そしてわたし自身と、わたしの信仰に対する態度に重要な影響を持っています。コミュニケーション能力こそが、交流つまり、『障害者』と、『障害のない人』のインテグレーション「統合」を可能にするということ、そもそも期待していたものとは別のことで

あつたとは言え、わたしはこの週に体験しました。わたしたち学生に障害者との具体的なインテグレーションを身を持って知ることを可能にしたベーターテルにおけるある体験の事からはじめたいと思います。わたしの友人ユリアとわたしは隣接している二つの施設　大ベーターテルとネボでこの週末の数日を働きました。わたしたちが働いた施設の二人の女性患者と一緒にした散歩は特別でした。わたしの患者の名前はマリアといい、三六歳です・・・カフエで人々は好奇心をもって見ていましたが、彼らはすぐに元に戻り、だれも立ち上がったり、出て行ったりしませんでした。

わたしたちはマリアとウルスラがコート脱ぐのやキーキを選ぶのを手伝いました。注文を待っている間、わたしたちはテーブルでくつろいでいました。ウルスラとマリアはユリアとわたしの対面に座りました。わたしたちは間違ったことをしたのではないかと不安でした。二人はわたしたちを驚かせました。彼らは手で互いの腕をさすりあい、着ているものを身振りと言葉でほめあっていたのです。マリアはウルスラに『なぜ、あなたは話さないの？悲しいの？・・・話したくないなら、気にしないでいいのよ。』と語りかけていました。

この散歩は、わたしたちが障害者からいかに多くのことを学びうるかということを示しています。たとえば、わたしたちが自明のことと思っている些細なことを喜んだり、大事にしたりすることを。それは世界に対する別の視点であり、能力本位の人生（生存）に対するもう一つのものでありました。〔46〕

**学生たちは、自分自身の障害、社会的関係障害あるいは関係能力不足という問題点を取り上げている。たとえば、**

「この研修期間に、障害者との関わりにおいて一番の問題は、わたし自身にあることが次第に分かってきました・・・わたしは障害者でない人たちとの間でも同様の交流の難しさを覚えることがあります。けれども障害者の前では、それを隠したり、ごまかしたりすることはできませんでした。〔47〕」

「わたしたちがグループの中で確認したように、不安は多くの場合にわたしたちの方から生じています。この不安がわたしたちから障害者に投影されています。」<sup>48</sup>

「結論としてわたしが言いたいことは、わたし自身の交流障害の経験が重要であり、さらにわたしがこの障害ごどのように取り組むことができるかという可能性、つまり、困難や障壁しょうへき 抑圧や不安そのものをテーマとする可能性をさぐるということが重要であるということです。」<sup>49</sup>

### この件に関するセミナーの経過

「午前は実習にあてられ、午後は反省会が開かれました。会話と考察の記録から・・・わたしたちが『障害者でない人』と経験したものと同じ困難が問題となっていることが徐々に明らかになりました。どうすればグループや共同体の一員としての一体感を感じることができるようになるのでしょうか・・・。ある会話の中で・・・わたしがある患者の孤独な状態を、まるで自分のことのように感じ、わたし自身のグループに対する気持ちを抑えておくことができなくなって、ついにならぬことについて話しました・・・。このようにしてわたしにとって本質的な問題を考えることができるようになりました・・・。この話し合いは、わたしにとつての最も特別なグループ体験の出発点となりました。自分自身の気持ちを打ち明けることによって、自分のところが開かれるような体験でした・・・事実上、関係の次元で問題が解決されれば、すべてのことは容易に克服されるでしょう。この方法で初めてわたしは他の人たちと共にいるだけではなく、共に生きることが出来るようになりました。自分自身の気持ちのことを問題にしない限り、どのような内容も壁のようなものになってしまいません。」<sup>50</sup>

教会会議のメンバーも学生たちも、同じように発見した障害者の関係能力は、当時喧伝かてんされた人間としてゼロ」といふことばのもとで、ベーターを処理しようとしたヒットラーの



代理人ブランド博士と交渉する闘いにおいて、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク牧師<sup>51</sup>が最も強力な武器としたものであった。この会見で人間としてゼロという基準は何かということが問題とされた。それに対してブランド博士は次のよう答えている。

「病人と人間的交流を構築することができないということである。」

それについてフォン・ボーデルシュヴィンク牧師が反論している。

「教授殿、交流能力は二つの面によって判断されます。それはわたし自身にも他の人との交流能力があるかどうかにかかっています。わたしはこれまで交流能力をもたない人に会ったことがありません。」

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク牧師の甥のフリッツ・フォン・ボーデルシュヴィンクが、口頭で伝えられている会話を記録として残しているが、彼はさらに自分自身の事例を取り上げ、それは「わたしの人生において厳しい試練」であったと要約している。

『若いエブロンをつけた』志願者として、わたしは新エベネツアに配属された。朝六時に、わたしの人生で初めて第七病棟に入った。病棟の看護師ホランが、ドアのすぐそばのベッドからカパーをはねのけて言った。『あなたはフリッツの入浴の世話から初めてください。わたしはその光景を目にして、ほとんどドアの方へ飛びさがらんばかりに驚いた。全く痴呆状態の二歳の青年は、床すれだらけの皮膚と骨のかたまりのように見えた。彼はその膝をたえず痙攣させ、わきの下までひきつけていた。わきの下はそれ以上傷つけないように保護するために綿で覆われていた。彼は言葉を話すこともできず、食事も自分でとることができず、また排泄物も人の手によって処理してもらわなければならない状態であった。彼は汚れたベッドに横たわっていて、そのベッドは、まさにこのきたない病人のために特別に考案

されたものようであった。つまり、わたしは人生の中で、初めて人間としてゼロの人を見たのである。浴室で入浴させるために、このぞっとするようなかたまりを裸で腕に抱きあげた時、わたしはそれをほとんど地面に投げ出してしまいそうになった。一分ほど経って、この生き物がオムツを替られてベツトカパーの下に身を横たえた時、わたしは思った。こんなところには一日も居られない。けれども、その瞬間事件が起こった。このぞっとするようなかたまりが動き出し、片方の腕を高く上げたのである。わたしは驚いて看護師ホランを見た。彼は、それまで、わたしが病棟の中でも最も重度の患者とどのように交流できるかを黙って観察していたのであった。・・・しかし、彼の手助けが必要となったのである。わたしを憐れむと共に、学問的教育をうけた神学者がこれほどに無理解であることに唖然としながらもらした彼の声をわたしは今でも覚えていてる。『志願者さん、あなたはまだ気づいていないのですか。フリッツはあなたに感謝を示そうとしているのです。』しかし、わたしはこのフリッツの事を一人の人間として全く考えていなかった。わたしが彼を全く人間としてではなく、吐き気を催す対象として観察していたことを感じることでこの患者はどれほど苦しんだことだろうか。しかしながら、彼はそのことでわたしに報復しようとはせず、わたしに感謝することで、はじめて廃人を目にしたわたしの苦境を救おうとさえしたのである。病人である彼は交流能力をもっていた。健康なわたしはそうでなかった。それはかりか、彼によって交流能力を持つようにならなければならなかったのである。わたしたちはたちまちのうちによい友達になったのである。』<sup>152</sup>

障害者がもっている関係を築いていく能力は、学生たちの報告にも鮮やかに描かれている。

「わたしの状況は、まず第一に、『わたしがその人に何かをなさねばならない』という態度によるものでした。それと同時に間違いをするのではないかと、スタッフの期待に添っていないのではないかと、不安とも結びついていました。けれども同時におこなわれた学生グループの中の経験についての見直しや経験から得た 理論的だけではない 知識から、アラフナハスの人たちがわたしに何かを

してくれているのだということがわたしの状況を大きく変化させました。」<sup>53</sup>

「わたしたちはいわゆる『障害者』がわたしたちに橋渡しをしようとしているのを見てきました。というのは、彼らはまったく当然のこととして交流しているにもかかわらず、わたしたち自身が、障害を持つ人と交流するばあいに障害をもっているからです。多くの患者は、この点でわたしたちよりもはるかに優れています。そしてわたしたちは彼らから学ぶことができるだけであり、彼らの特異な存在を自然なものとして受け入れ、いわゆる弱者との交流の仕方を学ぶことができます。この点で彼らは強者となっています。」<sup>54</sup>

この関連で、さらに「健常者」のもう一つの危険性が指摘されるべきかもしれない。「自分自身の感情や要求を表わすことの無能力が人格構造となり、その上で、社会福祉業務の分野ではまるでオールマイティで非難の余地のない仮面をつけている」<sup>55</sup>ような、いわゆるヘルパー症候群についてである。<sup>55</sup>この問題は、ベータールのセミナーでもあらわれた。自分自身がけいれん性まひの身体に障害をもつ女子学生は、会話分析に基づいて、彼女の関係問題や、またベータールの居住者との交流困難を点検したが、その過程で、障害のない人たちに対する彼女の交流障害が確認された。

「わたしは、わたし自身が障害者であることを忘れるために、障害者の存在を必要としています。彼らがわたしを必要としていることが、わたしにはつきりと示されるからです。このことは障害のない人にもあてはまります。わたしたちはグループの中で一緒に気持ちよく働くことができますが、それはわたしがいつも、わたしのキャリア（以前の保育士としての活動やその後の資格取得）から、いろいろな

ことを提出することができるからです。彼らはみんな好んで問題をわたしのところに持ってきますが、けれども、もしわたしが何の役にも立たず、わたしの役割を果たさなければ、どうなるでしょうか？その時、すべては空しく、そこには何もありません。」<sup>56</sup>

後に、彼女は、ある人との会話に感じるこの種の空しさを観察し、もう一度取り上げて語っている。

「わたしは、一人である時にはわたしが本当に泣くことができるテレビ番組を何時間も見ます。その時、わたしにはなんらの役割も課せられておらず、わたしはわたしでいます。わたしはただの障害者A、Bであり、暖かさを望んでいます。また時に人間そのものであることを望んでいます。泣いた後は気持ちやすつきりします。しかし、そういうことができるのはわたしが一人きりの時だけです。他の人たちはこのようなわたしを知ることはありません。」<sup>57</sup>

セミナーが終わる時に、彼女はグループの中で次のように補足した。

「障害者であるわたしが、他の障害者とかかわる時の姿勢は、まさにわたしが他人にしてほしくないと思っっている姿勢そのものだったということに初めて気がつきました。わたしはそれぞれの病気を持っているAやB、わたし自身ではなく、わたしはAやBがまるでそうであるかのように振舞うという役割を演じているのです。けれども、わたしはどのようにそれを変えたらよいのかということも知ることが出来ました。何らの問題もないかのように『上から』わたしの手助けを下すのではなく、わたしの問題を彼らと並んで考えることができます。」<sup>58</sup>

わたしたちはこの点においてはシュミットパワーの発言に同意することができる。

「尊厳ある人間の特性の成立が厳密に吟味されたとしても、その価値が失われることはないと思われる。」<sup>59</sup>

しかしながら、わたしたちキリスト教信仰と社会倫理の分析の中で、看護職の葛藤についてなされている彼の議論を取り上げなければならぬ。

シュミットバウアーは、キリスト教と工業化社会の歴史的関係は必然的なもの(と思われる)と主張し、彼はヘルパー症候群との関連で本質的要素を取り上げている。

「第一の点は、人間の原罪についての考えである。・・・第二の点は、キリスト教が全く明確に利己主義の価値観の上に利他主義の価値観をおいていることである。『隣人を自分のように愛しなさい。』」

「そのように、隣人を愛する義務がある。隣人愛は原罪の教えと、自己の中に本来備わっている悪についての教えとの特殊な関係の中に入っていく。隣人愛はいわば自己憎悪を超えた道にいたる。」<sup>60</sup>

さらにシュミットバウアーは彼の記述の中で結論を短く要約している。

「ヘルパー症候群のメカニズムを通して、自分を傷つけるまで消耗しても喜んで働く人がいなくなれば、わたしたちの社会の福祉業務はもはや機能しなくなるだろうとさえ考えられる。無私と自己犠牲は現在においてもキリスト教倫理を代表する価値観である。『隣人を愛しなさい』の前に置かれた『自己のように』に対して十分に注意が払われていない。」<sup>61</sup>

神学は隣人愛の解釈において、長い間「隣人を愛しなさい」という一面だけを取り上げてきたとシュミットバウアーが言っていることは確かに正しい。けれども、彼はマタイ福音書

七章一二節における山上の説教の黄金律にある「してもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」を見落している。それは、たとえば宗教改革の時のように、過渡期においては生活条件が変わることで形骸化けいがいかした伝統は捨てられ、人々は新しい行動様式を身につけるようになるが、神学史の中でも特にそのような時にはいつもこのような言葉が重要な意味をもっていた。黄金律の言葉は今日、教会ではあまりはつきりと語られていない。しかし、この山上の説教の言葉において、わたしたちにふさわしい愛の要求と、隣人に対するわたしたちの行動を伴った援助の関係を見落してはならない。シュミットパウアーはキリスト者の自由の重要な次元を見落している。わたしたちはこのことを、信仰者の自己決定と理解する。彼らはシュミットパウアーが言う「不安や精神的虚しさ、自己の欲求と必要に対する予防としての社会的支援」<sup>62</sup>「症候群におかされた「無力なヘルパー」に対し、自分の中に働く神の業に実際に答えて介護する者となった「自由なヘルパー」と定義される。彼らは自分自身が神に肯定され選ばれた体験をもっているからこそ、この経験を他人と分かち合うように動かされる。先にのべたわたしたちの考察に従い、さらに多くの伝記に基づいて言えば、これはキリスト者の「批判的で共感的な対応」である。わたしたちは、どんな人にも自由になる可能性と強制や自分の経験にとらわれてしまう可能性との、二つの可能性があることを承知している。学生たちはベーターで、「自由なヘルパー」の喜びに出会うと共に、「無力なヘルパー」の苦悩にも同じように出会っている。

わたしたちの経験に照らしてみると、わたしたちの共同体の中に、多くの自由で有能なヘルパーを発見することができるという見解に同意することが出来る。しかし、被害者が経験している危機について、わたしたちはほとんど知らない。また、わたしたちの日々の行動が彼らにとつてどれほどの負担になっているかをわかっていない。またわたしたちは、危機の時にケアがなされれば困難を軽減できるということを十分に理解していない。今日おこなわれている社会復帰へのさまざまな処置は、いずれも治療時間に制限され、社会福祉サービスは相談時間にだけ限定されている。

わたしたちの問題提起は、隣人関係の中での、労働社会の中での、教会の中での、共同生活をとりあげている。業績や物の所有を過大評価する結果、わたしたちの社会は、共感の欠如、交流能力の無視が特徴となっている。この交流能力の欠如は、苦しむ人に対して、大きな問題となり、特に、彼らが社会的に孤立する原因となっている。危機対処のらせん局面を考察することから、わたしたちは学習の準備をすでにしている、そのような人だけが、ケアをすることができるのだということが出来る。このような準備の不足が中心問題である。どのようにして、障害をもたない人の社会的障害が生じてきたのかという問題が浮上してくる。一九七七年、ベルリンでおこなわれた第一七回ドイツ福音主義教会会議でトビアス・ブルツヒャー<sup>63</sup>は「健康な人の病気・病人の健康」という主題をあげている。

彼は社会的観点から彼の命題を説明する。

「見せかけの健康が病気を作り出した。この病気は満たされるはずもない偽りの健康や業績という理念が作り上げたわたしたちの社会に対して悲惨な影響をもたらしてきた。業績を上げることがこぼむ者は病人とみなされ、量よりも質を大事にする彼らの考え方は伝統的な考えに慣れ親しんだ大多数の人間には受け入れられない。」

ブロッヒヤーはいわゆる健康な人の病気を、弱気、秘密、恥、疑念、劣等感、もしくは、思い上がった反抗心、そして過剰補償かじょうほしょうの誇大妄想として説明している。それに対して、彼は、開放性、誠実、不安からの自由、そして恥らうことなく自分を語ることを求めている。それによって、他の人たちは語る人に共感し、一つになれるだけでなく、自分自身をゆだね、打ち明けることを拒まないという態度から多くを学ぶことができるからである。さらに「このことは、病気や障害を負う人にとって、要求として、挑戦として、過ちの是正として決定的な役割を果たすものであり、わたしたちが相互に依存していることを想起させるものである。フィッシャー64」<sup>64</sup>と他の人たちは、人間的な観点からの解釈をしようとしている。彼は、「お荷物」というひどい言葉の意味を逆転させ、その正体をあきらかにする過程で、障害者でない人間をとりあげ、彼らがその健康さによってまわりの人たちの負担となっているとしている。

「健康と強さに関する自分の権利を必要だとためらいもなく言う人、神も人も必要でないほど健康だと思えて初めて安心できる人、また他方で、いつも彼らの力と財産また時間が失われるのではないかと心配している人、助けを必要としている人に手助けをできるにもかかわらず、その援助から逃れている。」



人・・・

反対に、「お荷物」にとっては重要なことは、個人的、また公的な連帯責任や献身、重荷と苦しみを共に負うことを無造作に逃れているお荷物の方が圧倒的に多数である。社会にとっての重荷となっているのは彼らであり、障害を負った人たちではない。彼らはみせかけの力と健康によって社会をまみさせている。」

この命題によって、わたしたちは、関係能力の欠如について、どう考えたらよいか手がかりを与えられる。けれども、この命題は人間関係を育て、築いていく能力と、そしてわたしたちが最後の章でとりあげる苦しむ能力との関係の正しい熟考を必要としている。

モルトマン<sup>65</sup>は被害者や弱い人よりも健康な人と能力の高い人に特権を与えるドイツ連邦共和国を、アパルトヘイト社会とよんでいる。

「開放的で傷つきやすい社会にかわって、閉ざされた堅固な社会が、アパティーな構造をもって生まれる。活力のある開放的で傷つきやすい生活は、コンクリートで固められる。これはアパティーという現代の死、苦しむことを排除した生活、情熱のない生活・・・である。」

彼は、原子力事故による死、あるいは生態系が引き起こす死の不安を、「わたしたち自身の無感動」による予測可能な死と対置している。ホルスト・エバーハルト・リヒター<sup>66</sup>はこれらの問題の心理的要因を分析し、その要因を、根本的な規範に従わない逸脱者を自分たちから区別するために、規範に従い、境界を定めて生きる人の不安「の中にとらえている。被害者への社会の依存性は、社会の周辺グループつまり対照となるものを安全装置として必

要として起ることに起因すると説明している。リヒターはそのことを、心理的メカニズムによって説明している。

「・・・人は病気や奇形に関心をもつが、それは自分自身の健康と完全さを確認するためである。病気であり、治らないと印を押された人たちがいるといつことを常に「適度に」意識していれば、自身自身の完全性が損なわれることについての不安や避けられない死の不安も軽減することが出来る。」

プロツヒヤーが健康な人の病気として描き出した偽りの健康や成果主義の問題と平行して、わたしたちはリヒターに従ってこころの中にある最も恐れているわたしたち自身の自己イメージの分裂の問題を取り上げなければならぬ。これには、病気、障害、タブーとされてきた性的傾向などが含まれる。この点に関して、人は自分の外部に確認できたことについて自己の内部に確認する必要がない。「その自己イメージがもっている社会的働きから考えて）社会全体の機構の中で分裂のプロセスと、それに結びつく投影は、「あなたが体が弱く、病気であって、また年をとっているなら、それに対してわたしは強く健康で、若いといえよう」という二元的なモデルによって不安を克服しようとする太古からの試みの複製」という特徴を示している。カール・フリードリヒ・フォン・ヴァイツェッカー<sup>107</sup>は、苦しんでいる人に対して被害に会っていない人が不安を回避しようとするメカニズムおよび安定化を図ろうとする試みを、社会的に起こる心理的抑圧として哲学的に説明している。苦しんでいる人たちに対して敵対的な態度をとる社会に向けられている今日の訴えについて、彼は相

対的な正当性」についての問題であり、社会が苦しむ人を抑圧する権利についての問題とされている。彼の論拠は次のように始まる。

「人は愛さなければ、その人たちを助けることは出来ない。社会を正しく判断することが出来て、初めて、社会を改善することができる。そうでなければ、社会を変えることはあっても、社会を改善することは出来ず、そもそも闘おうとしている当の過ちを、まさにそれに対して闘いを企てた同じ過ちを繰り返すことになる。抑圧の正当性は、即ち人々が抑圧を必要としている点にある。」

ヴァイツゼッカーは、抑圧の基本的な目的を、望まないことを意識的に覆い隠す心理的行為と定義し、自我とその言語のそのような意識を心理的な成果とみなすことで、同時に、その人の自己同一性を構成する心理的な内容の選択を決定する心理的メカニズムの必要性を認められている。

「同じ内容の抑圧が当初は正しいものとされるにしても、しばらくすると、わたしたちが成長するのに、自分の良心に対する偽りという、偽りの最も危険な形になる。」<sup>68</sup>

ドロテー・ゼレは、自己の良心に対するこの偽りをただ漫然と生まれて生き続けている、人間の生きながらの死であり、また彼らの関係喪失そのものがその人たち自身の死と地獄であり、『パンのみにて』生きる聖書的死<sup>69</sup>であると説明している。

「わたしたちを実際に脅かす死、わたしたちを人生のただ中で包み込む死、それは関係性を失った死である。……人生のただ中で、生産プロセスのただ中で、わたしたちを呑み込む地獄である。」<sup>70</sup>

一九七八年の「世界教会協議会」は、障害者の孤立に関して、覚書の中で次のように宣言している。

「ある教会の中に障害者がいないならば、その教会は障害をもっている。障害の有無にかかわらずすべての人が一つであるということは、世界が非人間的なものから守られているしるしである。障害者がいるということは、人はだれでも弱く、危険にさらされた、生まれたばかりの赤子のように、神に造られ祝福された存在であるという自覚を忘れさせない……。わたしたちは、障害を負った人と障害を負っていない人とを一体性……。それは挑戦を意味するということを強調しておく。」<sup>〔7〕</sup>

わたしたちの考察の結論として、一方で、被害者がまだ被害に会っていない人間への明瞭な依存関係にあり、被害者自らがこの関係を押しつけることはできず、また他方でまだ被害にあっていない人間が苦しんでいる人間への不可視の依存関係にあり、この関係は健康な人間が危機対処の学習プロセスを避けることにより、その当人が生涯にわたって抑圧されることになるということが確認される。さらにこの事は、当人が自己同一性を見いだすことができず、そのためその経験を受けとめる力を衰弱させるといふ結果をもたらすことになるのである。

関係喪失によるこの「死」に対抗するために、わたしたちは被害者の伝記の分析から得られた結果を重視しなければならない。

- ・危機に見舞われた被害者がわたしたちの問題ではなく、「被害に会っていない」わたしたちが彼らの問題となっている。
- ・教会と社会は、被害に苦しんでいる人たちを必要とする。苦しんでいる人が教会と社会を必要とするように。

この二重の命題は、ケアをする人の課題を改めて考えるように、わたしたちを促す。被害者が周辺にだけ姿を現すというような環境に生きる人間は、だれもがこれまで被害者を見過ごしにしてこなかったか、自らの態度によって被害者がどのような体験をしたのかということとを、自分に問うべきである。被害者の絶えざる苦しみを目を向けることなく、思いやりのあるケアを拒むことによって、いつわりの価値観の強制から自分を解放し、萎縮した自己の能力を見出し、活用するチャンスが失われているのである。わたしたちは危機の中でパートナーを必要とする。すなわち、わたしたちが抑圧してきた人間存在の形式とは別のものを実現する人たち、限界を受けいれ待つことができる人たち、絶望の中を耐え、それによって才能を発揮する人たち、仲間作りができる人たちを必要としている。

けれども、その専門職において被害者と共に働く人たち、社会福祉士、社会教育家、作業療法士、教師、心理学者、医師、ディアコンと牧師、も、被害者の伝記の中に書かれている内容から、自らの態度を再検討するきっかけを見つけていることができる。今日の介護専門職

の活動の基本となっている「自立支援」の方法は、苦しむ人をケアする時に「教える者と学ぶ者との役割が交替可能である」という正しい認識を、まだ伝えていない。専門職の人たちも同じように、自分の弱さを直視することができれば、自らが取り組んだ人々から、「自立支援」を受けることができる。わたしたちに著しく欠けているのは、ケアをする人の決定的に重要な次元、すなわち関係能力である。

ここで、次に避けられない問題になるのは、この本のどの章でも表れている人生における苦しみの意味を、神学的課題として問うことである。